【研究ノート4】

「米国の住宅、オフィスビル動向について」

愛川 裕二

はじめに

平成5年5月に米国のワシントン D.C. にあるNAR (NATIONAL ASSOCIATION OF REALTO RS) 及びSIOR (SOCIETY OF INDUSTRIAL AND OFFICE REALTORS)に米国の住宅、オフィスビルの動向についてヒアリングを行った。今回はこのヒアリングの概要についてまとめたものである。

1. 不動産不況について

米国の不動産不況は、1980年代半ば、石油・一次産品価格の下落により深刻な不況に陥ったテササス州、ルイシアナ 州等南西部地域で、オフィスビルの価格が暴落したことに始まった。さらに、85~87年にかけて、コロデ、ワイオミング、アラスカ、ユタ といった鉱物産出州で低価格状態が続いた。しかしながら、これら石油、鉱物市場の悪化が生じた各州の不動産不況は必ずしも全国の市場、商業活動に影響を与える程は大きくはなく、全体としては必ずしも悪い状況を示さなかった。石油価格低下等の影響を受けた各州は、州の地方経済の多様化を積極的に展開した結果、1987年までには、不動産市場はかなりの改善を示すようになった。

一方、それと時期を同じくしてハイテク産業(例えばマサチューセッツのコンピュータ関係企業)が弱みを見せ始め、ニューヨークの株式市場も下落を示し金融市場における弱さを露呈した。この結果、オフィス市場においては需要が大幅に減退し、ホストンを例にあげると、1980年代の不動産不況が始まる前には空室率6%であったものが一時期は20%以上にもなった(現在は多少回復し17.5%程度で推移)。同様のことがニューヨーク市やワシントン D.C.でも起きた。住宅市場においてもそれまで価格上昇していた北東部において一気に下落するなど1987~89年にかけて経済及び不動産市場が弱含みに推移した。

現在、オフィス市場は震源地であったテキサス等の南西部地域の諸州はほぼ回復し、東海岸地域でも最悪期を脱して上向きになってきた。しかし、西海岸一帯、特に叶ンセルス等が現在悪化しつつある。一方、住宅市場はカリフォルニア、オレコン、ワシントン D. C. 、ハワイといった州の住宅取引活動は非常に盛んで物価の上昇を示しているなど、国の一部については住宅不況が続いているにもかかわらず、米国全体としては調子の良い所によって補完され、全体の数値にはそれ程の影響が現れていない。

2. 米国の住宅市場について

○住宅市場規模について

米国の住宅市場は、中古住宅(EXISTING)と新築住宅(NEW)の二つに分けられる。このうち1992年の戸建て住宅(SINGLE-FAMIRY HOME)の取引件数は、中古住宅が年間352万戸、新築住宅は年間61万戸となっている(表1)。エリア別(NARでは全米を4つの地域に分割)中古戸建て住宅の取引件数は、北東部が53万4千戸、中西部が93万9千戸、南部が129万2千戸、西海岸が75万5千戸となっている。(表2)

また、全米の中古戸建て住宅成約価格は10万 3、700Fル(1Fル105円換算で 1,090万円)、新築住宅は12万 1、000Fル(同 1,270万円)と、当然ながら新築住宅は中古住宅より高くなっている [住宅価格は個別価格の集計ではなく、プライス・レンジ毎(100Fル単位)に何件という集計から導き出された中央値(MEDIAN)の集計]。エリア別中古戸建て住宅成約価格は、北東部が14万Fル(同 1,470万円)、中西部が8万1、700Fル(同 858万円)、南部が9万 2、000Fル(同 966万円)、西海岸が14万 3、800Fル(同 1,510万円)と西海岸と太平洋岸が高く中部では安いといった傾向が表れている。(表3)

(注)住宅価格、件数データの取り方についてNARの都市圏(Metropolitan Area)毎のデータ集計は1979年から取り始めているデータ収集エリアは当初25地域(都市圏人口は15万人以上)であったが、その後徐々に増加し昨年は126地域、今年はさらに132地域に増やしている。州(STATE)毎の取引件数、都市圏毎の成約価格は集計しているが、州ごとの成約価格、都市圏の取引件数のデータはない。また、調査対象となっている取引件数は実際の取引数量のおよそ半分に相当。全体の取引件数について10年毎に行っている国勢調査のデータの数値とNARのデータの数値を比較し調整の為の係数を作り、全体の数値を毎年推計している。

(表1)

United States Summary

		Single-I	,							
		Home			of Homes		' Supply	of Single-Family		
		(Seasonally		Available			nes on			
	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	Annual			Period)	the Ma			mes	
Year		Existing	New	Existing	New	Existing	g New	Existing	New	
1990		3,211,000	534,000	1,970,000	321,000	*	*	\$95,500	\$122,700	
1991		3,220,000	509,000	2,130,000	284,000	*	*	100,300	120,000	
1992		3,520,000	610,000	1,760,000	271.000	*	*	103,700	121,000	
1992	Mar	3,500,000	552,000	2,650,000	279,000	8.9	6.1	\$104,300	\$120,000	
	Apr	3,490,000	552,000	2,580,000	274,000	8.7	6.2	103,500	120,000	
	May	3,450,000	552,000	2,510,000	273,000	8.6	5.9	103,100	113,000	
	Jun	3,320,000	584,000	2,510,000	273,000	8.9	5.7	105,500	124,500	
	Jul	3,380,000	622,000	2,360,000	271,000	8.3	5.5	102,800	118,000	
	Aug	3,340,000	625,000	2,400,000	270,000	8.7	5.3	105,000	123,500	
	Sep	3,380,000	672,000	2,250,000	267,000	8.2	4.9	103,500	119,500	
	Oct	3,710,000	637,000	2,410,000	264,000	7.9	5.1	103,400	125,000	
	Nov	3,860,000	615,000	2,230,000	267,000	7.0	5.3	102,700	128,900	
	Dec r	4,040,000	662,000	1,760,000	265,000	5.2	4.9	104,200	126,000	
1993	Jan r	3,780,000	597,000	2,030,000	266,000	6.4	5.3	\$103,100	\$118,000	
	Feb r	3,460,000	608,000	2,230,000	268,000	7.7	5.3	103,600	128,400	
	Mar p	3,360.000	637,000	2,250,000	269,000	8.0	5.1	106,000	125,000	

r Revised p Preliminary * Not Applicable

Unit Volume

EXISTING SINGLE-FAMILY HOME SALES

Year		United States	North- east	Midwest	South	West	United States	North- east	Midwest	South	West
1990	***************************************	3,211,000	469,000	831,000	1,202,000	709,000					
1991		3,220,000	479,000	840,000	1,199,000	702,000	l				
1992		3,520,000	534,000	939,000	1,292,000	755,000					
			Seasor	ally Adjusted	Annual Rates			No	ot Seasonally	/ Adjusted	
1992	Mar	3,500,000	530,000	910,000	1,340,000	730,000	307,000	39,000	87,000	115,000	66,000
	Apr	3,490,000	510,000	900,000	1,300,000	790,000	322,000	44,000	92,000	118,000	67,000
	May	3,450,000	520,000	920,000	1,260,000	740,000	323,000	50,000	85,000	115,000	72,000
	Jun	3,320,000	520,000	860,000	1,240,000	710,000	354,000	53,000	95,000	124,000	82,000
	Jul	3,380,000	520,000	920,000	1,240,000	700,000	322,000	55,000	88,000	117,000	62,000
	Aug	3,340,000	530,000	860,000	1,230,000	730,000	314,000	54,000	83,000	112,000	66,000
	Sep	3,380,000	530,000	910,000	1,250,000	700,000	284,000	50,000	71,000	98,000	65,000
	Oct	3,710,000	560,000	1,020,000	1,320,000	810,000	317,000	55,000	81,000	105,000	75,000
	Nov	3,860,000	590,000	1,050,000	1,400,000	820,000	283,000	38,000	65,000	123,000	58,000
	Dec	4,040,000	630,000	1,050,000	1,490,000	870,000	278,000	38,000	70,000	110,000	60,000
1993	Jan	3,780,000	600,000	1,010,000	1,360,000	810,000	211,000	35,000	54,000	81,000	40,000
	Feb r	3,460,000	550,000	890,000	1,290,000	740,000	217,000	30,000	65,000	79,000	44,000
	Mar p	3,360,000	500,000	920,000	1,250,000	700,000	303,000	38,000	89,000	111,000	64,000

r Revised p Preliminary

Components may not agree due to rounding.

(表3)

Sales Price

SALES PRICE OF EXISTING SINGLE-FAMILY HOMES (Not Seasonally Adjusted)

					(MOL Seas	onany Ac	ijusieu <i>j</i>				
		United	North-				United	North-			
Year		States	east	Midwest	South	West	States	east	Midwest	South	West
			ŀ	Median					Average (M	1ean)*	
1990		\$95,500	\$141,200	\$74,000	\$85,900	\$139,600	\$118,600	\$154,700	\$86,100	\$105,600	\$155,900
1991		100,300	141,900	77,800	88,900	147,200	128,400	166,800	90,800	112,300	175,000
1992		103,700	140,000	81,700	92,100	143,800	130,900	165,100	95,200	116,500	175,100
1992	Mar	\$104,300	\$145,000	\$81,100	\$92,200	\$144,000	\$130,300	\$168,800	\$93,700	\$114,700	\$175,000
	Apr	103,500	142,000	80,900	91,500	144,400	130,700	167,600	94,500	116,500	173,800
	May	103,100	142,500	81,600	92,400	144,000	131,000	166,700	94,000	117,300	174,800
	Jun	105,500	143,600	82,400	93,000	145,900	133,900	171,800	96,600	119,600	177,700
	Jul	102,800	141,100	81,500	91,400	143,800	132,200	168,500	95,000	115,900	179,700
	Aug	105,000	142,000	82,400	95,200	138,500	132,400	167,500	96,600	120,700	171,900
	Sep	103,500	137,500	81,800	91,600	145,500	131,000	162,900	96,400	114,700	178,300
	Oct	103,400	135,300	82,300	91,800	142,700	129,300	158,400	95,700	115,200	173,900
	Nov	102,700	137,500	82,300	92,000	137,300	128,800	159,400	96,200	116,700	168,100
	Dec	104,200	135,800	81,600	92,600	143,700	131,000	159,500	97,300	117,100	175,400
1993	Jan	\$103,100	\$134,400	\$82,600	\$89,900	\$141,300	\$129,400	\$155,900	\$99,100	\$115,200	\$171,600
	Feb r	103,600	136,900	83,800	90,100	141,100	129,600	160,300	100,200	113,200	171,200
	Mar p	106,000	140,800	85,200	92,200	144,100	131,900	162,800	99,900	116,200	175,800

^{*} Beginning January 1991, mean prices are computed from more detailed information on high priced homes and therefore cannot be directly compared to previous averages.

○日米住宅市場の比較

日本では「生活五ヵ年計画」で大都市圏において勤労者世帯の平均年収の五倍程度(諸条件の下における住宅の取得のために調達可能な資金額)を目安に良質な住宅の取得が可能となることを目標としている。一方、米国の場合は年間収入と住宅ローン支払い額とで比較が行われている。92年は年間世帯収入の中央値(Median Family Income)3万6,837ドル(1ドル105円換算で387万円)に対し、その20%にあたる月額615ドル(同6.5万円)、年間で7,380ドル(同77万円)を住宅ローンの元本と金利の支払いにあてている。年間収入に対する住宅ローン支払い額の割合は住宅価格上昇、年間収入減少にもかかわらず、住宅金利(MORTGAGE RATE)の低下により、92年は90年に比較して2.8ポイントのダウンとなっている。(表4)参考に日本と同じく住宅価格と年収での比較をすると、92年の全米の中古戸建て住宅価格(10万3,700ドル)は年間世帯収入(3万6,837ドル)の約2.8倍になる。なお、一般的には貸付け金融機関は税込粗収入の30%以内におさめることを貸付けの基準にしており、返済期間は30年間で、新築、中古での返済期間の違いはない。

土地神話については、米国では30年代以降80年代までは今回見られたような大幅な住宅価格の下落はなく、80年代まではアメリカ人も日本人と同じく土地の価格は上がるものとの見方を一般的には持っていたようだ。その意味では米国にも土地神話があったと言える。しかし、80年代後半以降、住宅価格が高騰・下落を示したが、日本のように土地神話がマイナスになるという意識は現在もないようである。

(表4)

Housing Affordability

				Monthly	Payment	Median				***************************************
		Existing Single-	Mortgage	P&I	as %	Family	Qualifying		Affordability Ind	exes
Year		Family Home	Rate*	Payment	Income	Income	Income**	Composite	Fixed	ARM
1990		\$95,500	10.04%	\$673	22.8%	\$35,353	\$32,286	109.5	106.5	118.3
1991		100,300	9.30	663	22.1	35,939	31,825	112.9	109.9	124.2
1992		103,700	8.11	615	20.0	36,837	29,523	124.8	120.2	145.1
1992	Mar	\$104,300	8.42%	\$637	21.1%	\$36,164	\$30,569	118.3	113.3	137.9
	Apr	103,500	8.55	640	21.2	36,239	30,701	118.0	113.8	137.6
	May	103,100	8.48	633	20.9	36,314	30,385	119.5	115.1	138.7
	Juń	105,500	8.34	639	21.1	36,389	30,692	118.6	113.9	136.2
	Jul	102,800	8.05	606	20.0	36,464	29,103	125.3	120.6	146.8
	Aug	105,000	7.90	611	20.1	36,539	29,305	124.7	120.2	145.5
	Sep	103,500	7.70	590	19.4	36,614	28,336	129.2	124.6	148.5
	Oct	103,400	7.64	586	19.2	36,689	28,144	130.4	125.3	154.0
	Nov	102,700	7.77	590	19.3	36,763	28,308	129.9	124.4	153.0
	Dec	104,200	7.80	600	19.6	36,837	28,804	127.9	121.5	150.3
1993	Jan	\$103,100	7.75%	\$591	19.2%	\$36,899	\$28,363	130.1	123.9	150.4
	Feb r	103,600	7.51	580	18.8	36,960	27,844	132.7	126.4	156.3
	Mar p	106,000	7.39	587	19.0	37,022	28,155	131.5	126.3	158.3
	Mar p							This month	Month Ago	Year Ago
	Northeast	\$140,800	7.35%	\$776	22.8%	\$40,871	\$37,242	109.7	113.1	93.2
	Midwest	85,200	7.23	464	14.6	38,088	22,284	170.9	172.8	153.3
	South	92,200	7.17	499	18.2	32,870	23,952	137.2	139.3	117.3
	West	144,100	7.16	780	24.6	38,104	37,417	101.8	103.1	87.2

^{*}Effective rate on loans closed on existing homes - Federal Housing Finance Board. Regional interest rates from HSH Associates; Butler, NJ **Based on current lending requirements of the Federal National Mortgage Association using a 20 percent down payment.

p Preliminary r Revised

○住宅価格変動の要因について

固定資産税は地域ごとに税率は異なるが、経年的に大きな変動はなく、それほど住宅価格変動の要因にはなっていない。また、連邦所得税については、利子控除、固定資産税の控除が行われなくなれば、住宅価格及び需要にネガティブな影響が出るであろうが、ローン利子は全額控除可能のうえ、固定資産税も当然控除されることから所得税制が大きな影響を与えたかという意味では変化はない。

さらに、86年の税制改正はアパート(米国ではアパートの数は少ない)まで含めた不動産市場にマイナスの影響をもたらしたが、戸建て持ち家住宅には殆ど影響がなかった。ただし、オフィス市場は86年税制改正以前までは急激な勢いで必要以上のオフィスビルが供給され、銀行及び貯蓄金融機関もそこに多くの資金を供与した結果、不動産価格急落により金融機関の大量破産が発生し、オフィス超過供給が長期的な影響として現在でも米国の多くの地域で残っている。

投機需要については経済の好調を背景にした過度の需要期待、特にキャピタルゲイン狙いの投機的取引が価格をさらに押し上げた地域も一部にもはあるが、全国的には投機的需要はなかったようである。

このように住宅価格の急騰、急落の原因は、税制上、金融上というよりも専ら経済状況の変化によるものと言える。

○最近の住宅市場動向

70年代から80年代の前半にかけてポストン、ニューヨーク、南かりフォルニア 地域の経済活動は下降 気味であった。その趨勢が80年代半ばには反転し、85~87年にかけ経済活動が非常 に活発になり住宅需要が高まったが、住宅供給が需要に追いつかなかった。そのため住宅価格は大幅に上昇した。

しかし、経済活動が高揚した後の87年には、ハイテク産業の弱みが露顕するにともない住宅市場も下落に転じた。短期間での投機利益を狙っていた多くの投資家は損失を被っても物件を処分するといった行動をとり、実需層も住宅取得をストップした。その結果、85年までは平均20%程度上昇していた住宅価格は87年には5~10%の下落となった。

最近の動きとしては、軍事費削減の影響により宇宙航空産業が困難に陥るとともに住宅取引が全国的に減少している。特に、最後まで地価が上昇を続けていた西海岸の南州フォルニア、サンティエコ、ロサンセルス 地域でも実需や投資需要の減少により住宅価格の著しい下落が見られる。さらに、昨年のロサンセルス暴動に代表されるような ネカティフな報道も住宅市場に水を差すものになっている。

92年に入り南加フォルニアとハワイを除く住宅市場はある程度の回復を示すようになり、92年の第IV四半期(9~12月)の住宅取引件数は大幅に増加した。これは選挙の時期も重なり消費者が住宅市場に自信を取り戻してきたことによると思われるが、93年第IV四半期(1~4月期)は92年第IV四半期のような活況は示してはいない。

このような中、中西部地域だけは他の地域に見られるような大幅な価格の上昇、

○住宅価格変動の要因について

固定資産税は地域ごとに税率は異なるが、経年的に大きな変動はなく、それほど住宅価格変動の要因にはなっていない。また、連邦所得税については、利子控除、固定資産税の控除が行われなくなれば、住宅価格及び需要にネガティブな影響が出るであろうが、ローン利子は全額控除可能のうえ、固定資産税も当然控除されることから所得税制が大きな影響を与えたかという意味では変化はない。

さらに、86年の税制改正はアパート(米国ではアパートの数は少ない)まで含めた不動産市場にマイナスの影響をもたらしたが、戸建て持ち家住宅には殆ど影響がなかった。ただし、オフィス市場は86年税制改正以前までは急激な勢いで必要以上のオフィスビルが供給され、銀行及び貯蓄金融機関もそこに多くの資金を供与した結果、不動産価格急落により金融機関の大量破産が発生し、オフィス超過供給が長期的な影響として現在でも米国の多くの地域で残っている。

投機需要については経済の好調を背景にした過度の需要期待、特にキャピタルゲイン狙いの投機的取引が価格をさらに押し上げた地域も一部にもはあるが、全国的には投機的需要はなかったようである。

このように住宅価格の急騰、急落の原因は、税制上、金融上というよりも専ら経済状況の変化によるものと言える。

○最近の住宅市場動向

70年代から80年代の前半にかけてポストン、ニューヨーク、南かりフォルニア 地域の経済活動は下降 気味であった。その趨勢が80年代半ばには反転し、85~87年にかけ経済活動が非常 に活発になり住宅需要が高まったが、住宅供給が需要に追いつかなかった。そのため住宅価格は大幅に上昇した。

しかし、経済活動が高揚した後の87年には、ハイテク産業の弱みが露顕するにともない住宅市場も下落に転じた。短期間での投機利益を狙っていた多くの投資家は損失を被っても物件を処分するといった行動をとり、実需層も住宅取得をストップした。その結果、85年までは平均20%程度上昇していた住宅価格は87年には5~10%の下落となった。

最近の動きとしては、軍事費削減の影響により宇宙航空産業が困難に陥るとともに住宅取引が全国的に減少している。特に、最後まで地価が上昇を続けていた西海岸の南州フォルニア、サンティエコ、ロサンセルス 地域でも実需や投資需要の減少により住宅価格の著しい下落が見られる。さらに、昨年のロサンセルス暴動に代表されるような ネカティフな報道も住宅市場に水を差すものになっている。

92年に入り南加フォルニアとハワイを除く住宅市場はある程度の回復を示すようになり、92年の第IV四半期(9~12月)の住宅取引件数は大幅に増加した。これは選挙の時期も重なり消費者が住宅市場に自信を取り戻してきたことによると思われるが、93年第IV四半期(1~4月期)は92年第IV四半期のような活況は示してはいない。

このような中、中西部地域だけは他の地域に見られるような大幅な価格の上昇、

下落を経験していない。それはこの地域が農業中心の地域であるとともに自動車産業、自動車部品、自動車関連産業が集中しており、他の地域で見られるような急速な価格上昇がなかったかわりに、現在の不況による影響も他の地域に比べれば小さかったからである。

3. 米国のオフィスビル動向について

○オフィス市場の推移

米国の不動産市場は30年代から50年代にかけてはほとんど変化はなかったが、70年代から80年代の商業関連の建設ブームを背景に大幅に拡大した。オフィスビル着工件数も76年を谷に85年までほぼ一貫して拡大、この間の増加率は年率15%の高率であった。その結果、全米でオフィスの供給過剰が生じ、今世紀中は商業関連の建設は大きく増えることはないであろうと言われている。現在、商業不動産の民間オフィス面積(ストックベース)は約50億平方7ィート、政府その他の公共オフィス面積は約 100~110 億平方7ィートになる。

オフィス空室率は89年以降20%前後の高水準で高止まりしている。高水準が続いていた南西部で反転低下する一方、北東部、太平洋岸では大幅に上昇している。都市別に見ると、ヒューストンは86年の逆石油危機や農産物の下落を受け、経済が不況に陥ったことから他の地域に先立ち不動産市場の悪化が表面化し、最悪期は30%を超える空室率を示したが、以後新規オフィスビル建設が完全にストップしたこともあり石油価格の安定等による地域経済の底入れとともに空室率も低下した。一方、ホストンでは80年代後半の東西緩和が国防産業への依存度の高い北東部経済を直撃したこと等から空室率は大幅上昇、ニューヨークも87年のブラックマンデー以降、金融業のレイオフや相次ぐ業務縮小の影響により、マンハッタンの中心街にさえ多数の空室がみられた。

○オフィス価格、空室率、賃貸料の現状

最近のオフィス価格は、30~80%の大幅な下落傾向にある。但し、地域によって大きな違いがあり、また一つの地域の中でも細かく見ると様々な違いが見られる。例えば米国において伝統的に市場が安定していると言われてきたワシントン D. C. では、タウンタウン(中心地区)の価格は下がり幅が小さい所で20%、大きな所では50%程度の値下がりを示している。さらにワシントン D. C. 周辺地区では下がり幅は大きく中には80%程に達している地区もある。

都市別に見ると、ロサンセルスなど西海岸地域では価格は下落を続けている。ワシントン D. C. のタウンタウン地区では底を打ち回復の兆しが見えているが、周辺地区ではまだ底のままで推移しており回復の兆しは表れていない。他の地域についてはいまだ回復傾向は見られず、上昇を示している地域はごくまれとなっている。

全米の空室率は現在16%であるが、地域により大幅に格差が生じており、いくつかの大都市圏では最高30%程の空室が生じているところもある。大方の予測は向こう2~3年は全国的にこのままの水準で推移するであろうと見ている。その背景としては、供給面で新規ビル建設が減少しオフィススペースの増加がなかった事がい

えるが、需要面で米国政府の防衛予算大幅削減による既存オフィススペースの余剰が出てきているということもある。いずれにしても、米国全体の経済が低迷しており、今後すぐには空室率が大きく向上することはないであろうと考えられる。

賃貸料は幾つかの市場ではまだ下がっているところもあるが、投機的な建設がなくなり鎮静化して一部の地域では年内に賃貸料が回復に向かうところもある。市場全体としては非常に底に近い状態にあると思われる。しかしながら、例えばIBM 社がリストラをし、工場を閉鎖するといったレイオフを行うなど様々な要因により今後も空室が増えることが予測されることから、全国的にみてごく近い将来に賃貸料が回復することは無いであろうと考えられる。

このような中、幾つかの市場において新たな現象が見られる。例えば、メリルリンチ系の会社でゼル(ZELL)という会社があるが、このような幾つかの会社が今後回復が見込まれるであろうと思われる市場で割安な物件を購入し始めている。また、年金のファンドを使い値頃な物件を購入するといった傾向も見られている。但し、このような現象はごく一部の地域に限られたもので、彼らの購入する物件は空室率がそれほど高くなく、最低でも75%以上はテナントが入居しているところに限られている。

○オフィスビルの供給過剰の原因

米国のオフィスビルの供給過剰の原因は、一般的には過剰な成長期待、規制の緩和、大量の金融、税制の緩和が考えられるが、このうちどの要因が大きく寄与したのか、原因については地域によりばらつきがあり様々な理由が考えられる。

一つには、経済の先行きの見通しに対して過剰な期待をもち、それに合わせて不動産市場へ投資を行ったことがあげられる。例えば、テキサスでは原油価格が上昇を続けていた時代には開発業者が先を争いオフィスビルの新規建設を行い、原油価格が下落を始めた80~81年においてもヒューストン地域では 3,000万平方フィートのオフィス床面積が建設中であった。また、政府は81年にS&L業界の大幅な自由化を実施したことから、不動産業界に多額の資金が流入したことも背景にあげられる。さらに、政府は税制の優遇措置を不動産の開発について行う方針を打ち出した結果、80年代前半から非常な勢いで不動産の建設が増えた。その後86年に再び法律が改正され税制上の優遇措置が廃止され税制上の理由による不動産投資は減少に転じが、その時点では経済全体の成長率は非常に旺盛であったことから、不動産投資に向かう資金の量は衰えなかった。

ところが、80年代後半には金融機関の倒産が相次ぎ、政府においては防衛関係の 投資が大幅に削減され、また急成長を続けていたエレクトロニクス業界が80年代中 頃にかけて思い描いていた薔薇色の未来の見通しにも翳りが出始め、大幅な供給の 増加に対し需要の伸びはそれ程ではなかった。

このように、経済の先行きの見通しに対して過剰な期待を持ち、それに合わせて 不動産市場へ大量投資を行ったが、予想に反して経済が低迷し需要がそこまで伸び ず供給過剰の事態に陥った。

○不動産市場の回復の鍵

米国の不動産市場はオフィスの供給過剰により、今世紀中は商業関連の建設は大きく増えることはないであろうと言われている。このような状況のもと建設投資を行うに当たり考えられることは、投機的建設投資は一切行わず、新たに建設投資を行う場合にはオフィス稼働率を出来れば80%以上確保し、信用状況についても良好なものを確保する、さらに契約期間も投資を回収するに足るだけの長い期間に渡るものにするなど慎重に決断することが必要である。

また、不動産開発については開発業者は多額の損失を出すなど大きな落ち込みを見せており、この状況は残念ながら今後も続くと思われる。回復のためには以前とは異なる対応の仕方が求められてくるであろう。例えば、幾つかの建物を一つのグループにして貸し出すとかロックフェラー、ワールトトレートセンターのような巨大規模のオフィスビル建設ではなくよりリスクの小さい比較的小規模なオフィスビルに照準を合わせ開発を行うといったことが考えられる。

しかし、今後の不動産市場の回復の鍵を握っているのはやはり米国全体の景気、 経済であろう。現政権下で様々な景気回復策を行っている。これらが上手く機能すれば景気が上昇し、それに従い不動産市場も必然的に回復してくるであろう。現在、 浮いているオフィスの過剰供給分が吸収されていくには雇用の増大を通してしか実 現されないと考えられる。

したがって、政府は安易に不動産業界の建て直しを図るために建設投資を奨励するというようなことをするよりは、景気の回復そして雇用の創出といった所を先ずしていかなければならないであろう。

最後に現地でお世話になったアメリカ合衆国日本国大使館の一等書記官である赤川淳哉氏及び米国の不動産市場について資料を提供して下さった下記の方々に改めて感謝申し上げたい。

NAR DIVISION VICE PRESIDENT ECONOMICS AND RESEARCH DIVISION

MR. GLENN E. CRELLIN

PROGRAMS DIVISION DIRECTOR

GRUBB & ELLIS

SIOR

CHAIRMAN

MR. MARK J. CROWLEY

MR. JOEL R. CANNON

VICE PRESIDENT

MR. DAVID E. FITZGERALD

BARRUETA & ASSOCIATES CHAIRMAN & CEO

MR. J. FERNANDO BARRUETA

「あいかわ ゆうじ」 「土地総合研究所 研究員」